

### 3 回目 シャンシャーダ

1942 年、リオデジャネイロでアトランチダという映画会社が誕生する。会社のコンセプトは、「安い予算で、笑いあり、歌ありの大衆向け映画を制作すること。」

そしてこれが大当たりする。「シャンシャーダ」という新ジャンルを作るまでに至り、アトランチダはこのジャンルの映画製作第一人者となる。

シャンシャーダが映画館を超満員にできた理由は、これまでの映画と違い、話し言葉や俗語が使われた点、当時全国的に高視聴率だったリオデジャネイロ国営ラジオの人気歌手たちを映画に起用した点の二つで、特に、二番目の、歌声しか聞くことがなかったラジオの人気歌手たちをスクリーン上で歌わせたことが、大衆を映画館へ向かわせた一番の要因だったといわれている。また、スター制度の導入も、成功した大きな要因の一つで、40、50 年代のリオデジャネイロは、まさにブラジルのハリウッドとなり、喜劇役者オスカリト<sup>1</sup>、グランヂ・オテロ、二枚目役のアンセルモ・ドゥアルテを筆頭に、たくさんの映画スターを生み出した。大衆受けは良かったものの、映画批評家からは悪評ばかり。そういうわけで、できの悪い、雑で、なんの価値も持たない物を指す場合に使われる軽蔑用語、「シャンシャーダ」という言葉がこのジャンルのネーミングとなった。

シャンシャーダのストーリーはワンパターンで、決まって金持ちの二枚目と貧しいヒロインの恋愛物語。そこに富を狙って悪さを企む悪役が、二人の恋路を妨害しようとするが、最後にはお縄になり、若い二人はハッピーエンド。そしてストーリーの合間、合間に歌が挿入されるが、歌とストーリーは特に関連性があるわけではない。配役も基本的に同じ俳優が使われ、二枚目役はアンセルモ・ドゥアルテ、ヒロインはエリアナ・マセード、悪役はジョゼ・レウゴイ、二枚目を助ける役にオスカリトとグランヂ・オテロ。

50 年にはいり、シャンシャーダの題材がマンネリ化しだし、アトランチダはもっと複雑なストーリーが必要となった。当時、ブラジルはアメリカ文化の強い影響を受けていた。映画においても同じで、アメリカ映画の模倣が多かった。そういうわけで、観客動員のためにアトランチダもアメリカ映画のパロディー映画を撮るようになった。そして、50 年から 60 年までの 10 年間、シャンシャーダは映画

---

<sup>1</sup> ブラジル喜劇俳優を代表するオスカリトは、1906 年 8 月 16 日、スペイン、マラガで生まれる。2 歳のとき、両親と共にブラジルへ渡り、1949 年帰化する。5 歳のとき、両親が働いていたサーカスでデビューし、後に喜劇役者として芝居に出演する。オスカリトの映画デビュー作品は、1935 年の“*Noites Cariocas*”。これで注目を浴び、続いてシネジアの“*Alô, Alô Carnaval*” (36) をえて、映画会社アトランチダと契約する。もう一人の大喜劇俳優、グランヂ・オテロと組んだコンビが大成功し、アトランチダの看板スターとなる。1942 年から 62 年まで、34 本のシャンシャーダに出演。1970 年 8 月 4 日、64 歳で死去。

館を満員にすることができ、アトランチダは絶頂期を迎えた。

アメリカ映画をベースにしているにもかかわらず、この時代のシャンシャーダはブラジル人の日常生活を反映させた。例えばリオデジャネイロで流行った小話やマランドロの話し振り、ブラジル人の振舞い方などで、アメリカ映画のコピーでありながら、まがないブラジル映画だった。

しかしながら、サンパウロにヴェラ・クルススタジオが完成した時から、アトランチダの没落が始まる。ヴェラクルスの目的は、国際水準の技術を駆使して、シャンシャーダのような大衆映画を制作することだった。

アトランチダ没落のもう一つの原因は、ブラジルへのテレビの導入。この新たな娯楽が 60 年代浸透し、大衆の娯楽が映画からテレビに移っていった。特に、この頃から国産映画は人気がなくなっていった。

現在においても、批評家の間では、シャンシャーダは軽率な扱いを受けているが、ブラジルにもシャンシャーダのおかげで、国産映画産業が外国映画を差し置いて大成功した時期があったことを忘れてはいけない。

#### シャンシャーダ主要作品

##### — Watson Macedo 監督代表作品

- Não adianta chorar (1945)
- Este mundo é um pandeiro (1946)
- Carnaval no fogo(1949)

##### — José Carlos Bruel 監督

- Carnaval Atlântida (1953)

##### — Carlos Manga 監督

- Nem Sansão nem Dalila (1954)
- Matar ou correr (1954)
- O homem do Sputnik(1959)